の磁場構造はコロナ磁場構造よりかなり複離なものらしい．従って彩層内磁場構造は測定された光球の磁場強度を境界条件として計算しても観測にあわないといっても良い．その理由として，彩層と光球はごく接近しているので光球で観測された磁場の不正確さが影響すること，彩層内では物質密度は高く運動もあるので電流分布も複雑となり，計算に用いられる仮定があまり現実的ではないことによるのであろう．

書　評

広瀬秀雄「暦」

（日本史小百科 No. 5，近藤出版，1,600円）

出版界では古代史ブームが下火になって，いまは静かに暦ブーム期にはいっているようである．渡辺敏夫氏・広瀬秀雄氏・内田正男氏らの好著労作がぞくぞく出版されているが，本書もその一つ．記述は手馴れていて，豊富な知識をときにセーブしながら開陳しているところはさすがである．本書は「日本史小百科」と銘打つシリーズものの一篇で，日本史の中から神社・女性・荘園・墳墓など20項目を立てて，各項目につき専門家が執筆している．全巻が完成すれば立派な日本史百科辞典の体裁になっている．その体裁の中で面白いのは，細目別の解説文がつねに見開き2ページ分で完結していて，つぎのページにまたがらない点．このような字数の拘束は原稿を作る側にとっては負担であろうが，本書の場合は成功している．

内容について言えば，暦そのものは過去の遺物であり，厄介な太陰太陽暦にまつわる記述のほかに出ないから，類書もたくさんあり，あまり目新しいと思えない．ただ記述に当ってはつねに原典に立ちもどって紹介する著者日頃の主義が本書のような通俗書の記述にまでおよんでいるのは，読んでいてたのもしくなる．暦学関係はもとより，国文学国史学についての著者の造詣の深さには恐れいるのほかはない．珍しいのは具注暦中段下段の解説に力を入れている意図である．「受死日（最高の悪日：何をしてもいけない日であるが，葬送だけは差支えない）」とか，「血忌日（殺伐の気をつかさどるので，形戮・鍼灸などに大凶という）」とか，おどろおどろしい厄日が陳列されてある．明治5年の太政官達し第337号で撲滅されたハズのこれら厄日も，ここにはお化け大会をみるように紹介されていて，それで読者には全く無害というのは年月の経過の効果である．もっとも，著者としては，これらも国文学研究上に意義ありとしての記述なのであろう．

書評子は門外漢としてはわりに暦関係の類書に目を通す趣味をもつが，暦専門の著者らに一つの注文がある．本書をふくめて今まで発行された暦関係の解説書には暦そのものの作り方が故意に欠落または不鮮明にされている．各時代に行用された太陰太陽暦の特徴・計算法・用数の具体的紹介がない．唯一の例外は内田正男氏の近著「日本暦日原典」で，ここでは日本で行用された元嘉暦以下の算法が略述されている．しかし用数表を欠くから，読者は自ら暦算を試みることができない．内田氏の記述も，江戸時代の暦算家の算法を踏襲していてまことに難渋である．要するに四則算にすぎぬものを，事さら難しそうにみせるのは和算の悪いクセである．そこで書評子の希望するのは，読者自身が試算して験めせるような「暦の作り方」を西洋代数式に解説した書籍の出版である．暦家はもはや太陰太陽暦にまつわるエピソードの繰り返えしをやめて，暦算法を門外大衆の前に曝し，その算法の実際を演習的に示してくださらないものか．それを希望する人口が学際的多方面にいることはご存知のハズである．古くさい暦学といえども，「よらしむべし，知らしむべからず」の時代は遠く過ぎさっているのだから……．

（斎藤国治）

1978年5月の太陽黒点（g，f）（東京天文台）

1	7,	111	6	—,	—	11	—,	—	16	9,	74	21	8,	26	26	9,	98
2	6,	126	7	—,	—	12	7,	55	17	7,	87	22	7,	40	27	8,	71
3	5,	135	8	—,	—	13	8,	53	18	—,	—	23	7,	41	28	7,	108
4	5,	118	9	—,	—	14	6,	60	19	—,	—	24	—,	—	29	—,	—
5	5,	85	10	—,	—	15	7,	65	20	—,	—	25	7,	70	30	—,	—
															31	10,	77

（相対数月平均値：108.0）

昭和53年7月20日　発行人　〒181 東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
印刷発行　印刷所　〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251　啓文堂松本印刷
定価 300 円　発行所　〒181 東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359　振替口座 東京 6-13592